

## 20 選択的消化管内殺菌の院内肺炎に対する予防効果について

帝京大学救命救急センター

西田伸一, 多治見公高, 遠藤幸男, 小林国男

【目的】ICUにおける院内肺炎の予防を目的として19例の気管内挿管患者に選択的消化管内殺菌(以下SDD)を行いその有用性について検討した。

【対象及び方法】対象は表1に示した。SDD群に対しては表2に示す方法で抗菌薬を使用した。細菌学的検索は口腔内、気道内の細菌培養によって行い、肺炎の診断はこれに加えて、胸部X線上の肺炎所見、臨床所見から判断した。以上について肺炎の発生率を比較した。

【結果】対象の性差、年齢、重症度、予後について表3に示した。肺炎発生率はSDD試行前は29.8%であったのに対し、SDD施行症例では肺炎の合併はなく、両者には危険率5%以下で優位差がみられた(表4)。また、気道内検出菌の割合について、対照群ではグラム陰性菌優位であったが、SDD群ではグラム陽性菌が優位となった。

【考察】Stoutenbeekらの示すSDDの使用抗菌薬は主としてグラム陰性菌を対象としているため、現在本邦で問題となっているMRSAを初めとした耐性グラム陽性球菌に対する効果は少ない。経静脈的長期予防投与と比較して耐性菌の誘導は少ないと考えられるが、SDDの抗菌薬の選択には改良の余地があると思われる。

【結論】院内肺炎に対するSDDの予防効果が認められた。

表1 対象

### 7日以上気管内挿管が行われた症例

SDD群: 19例(1990年10月~1991年6月)

対照群: 57例(1990年1月~12月)

表2 SDDの方法

1. 胃管より以下を4回に分けて注入
 

Amphotericin B	2000mg/day
Polymyxin B	400万単位/day
Tobramycin	360mg/day
2. 上記薬剤を各2%含有する口腔内用軟膏を1日4回口腔内塗布
3. 広域抗菌薬をSDD開始後4日から7日間全身投与

表3

	SDD群	対照群
男性/女性	16/3	40/17
年齢	44.0±17.5	54.8±18.0
APACHE II score	18.9±7.9	20.9±9.0
死亡率	10.5%	45.6%

表4 院内肺炎合併率

SDD群	対照群
0% (0/19)	29.8% (17/57)